

非鉄金属概況

日本鉱業協会 企画調査部

金

【海外】

1. 価格推移

5月相場	高値	安値
ロンドン相場(\$/toz)	: 1,324.80 (11日)	1,285.85 (21日)
国内建値(円/g)	: 4,671 (11日)	4,569 (30日)
為替相場(円/\$、TTS)	: 109.41 (30日)	112.09 (21日)

5月の海外金相場は1日に\$1,309.20/toz(トロイオンス)と約4か月ぶりの安値をつけてスタートした。上旬では、米国の利上げが加速するとの観測が強まり、金利のつかない金は売られ、概ね\$1,310前後で弱含み推移となった。

しかし、中旬前半は、米ドルが主要通貨に対し小幅に下落したことで、\$1,320台で推移、上向きかけた動きを見せたが、中旬後半では、相場を押し上げていた中東等での地政学リスクへの反応が薄れ、市場の関心が米金利上昇やドル高など金の弱材料に移ったことで、調整局面入りとなり、15日には2017年12月以来の\$1,300台割れとなった。その後も、下旬前半にかけて、ドルの独歩高を背景に\$1,300水準を下回る値動きとなったが、24日にトランプ米大統領が6月に予定していた北朝鮮との会談の中止を発表し、米朝関係の先行き不透明感が強まったことで、金相場はあっさり\$1,300台を回復した。だが、それも束の間、北朝鮮が会談に対し再調整する動きを見せたこともあって、29日には再び\$1,300台を割り込んだ。しかしながら、翌30、31日には南欧での政治懸念の高まりが金の強材料となったことで、再度\$1,300台を回復、31日には\$1,305.35をつけて越月した。

2. 為替相場推移

5月の為替相場は1日に\$1=110.36円(TTS相場、以下同じ)でスタート、上旬は連休を挟んで、日米の金利差拡大を見込んだ円売り・ドル買いが優勢だったことから、概ね円安基調で推移した。7、8日では前週に発表された米連邦公開市場委員会(FOMC)声明や米雇用統計の結果等が米利上げの加速を意識させる結果とならなかったことで、やや円高に振れたが、9日以降は日米の金利差拡大に着目した円売り・ドル買いが出て、円は反落した。中旬にかけては、主として米長期金利の上昇による日米金利差の拡大を意識した円売り・ドル買いが優勢となったことで、ほぼ

\$1=111 円水準で推移、週明けの 21 日には\$1=112.09 円をつけ、1 月以来 4 か月ぶりの円安・ドル高水準となった。米中貿易摩擦の懸念が和らぎ、「低リスク」とされる円を売ってドルを買う動きが出たことも円安・ドル高基調を導いた。

ところが、下旬では、米長期金利の上昇に一服感が出て円買い・ドル売りが優勢となり、朝鮮半島情勢への警戒感も、「低リスク通貨」とされる円の買い戻しを誘ったため、円が再び上昇、\$1=110 円水準で小動きとなった。とくにトランプ米大統領による米朝首脳会談の中止声明を受け、29 日には\$1=110.25 円まで円が戻した。この間、同大統領がすぐに、米朝首脳会談について当初予定通り 6 月 12 日の開催を視野に入れていると表明したものの、円売り・ドル買いはあまり続かず、加えて月末では米国債利回りの低下や日経平均株価の下落が材料となって、円高・ドル安基調が続いた。30 日には、南欧の政治懸念が強まり、\$1=109.41 円まで円が上昇、翌 31 日も\$1=109.70 円とほぼ同じ円高・ドル安水準となって越月した。

円は対ユーロでも、対ドルで示したとほぼ同じような動きを見せた。月末の 30 日には南欧の政治危機から€1=126 円水準まで高騰、2017 年 6 月以来の円高・ユーロ安となった。

【国内】

1. 建値推移

5 月の国内金山元建値は連休中の 2 日に 4,642 円/g(グラム)と高値圏を保ってスタート、上旬にかけては 4,600 円台をキープ、11 日には 4,671 円と月間最高値をつけた。中旬では、海外相場の下落から下げ、4,600 円台前半での値動きとなった。下旬では、海外相場の下げ基調はストップしたが、反対に為替に円高基調が見えたため、4,600 円台を割り込み、ほぼ 2 か月ぶりの安値水準となった。30 日は 4,569 円と月間最安値をつけ、31 日には 4,577 円となり、4,600 円台を回復できぬまま、越月した。

2. 金地金生産・出荷・生産者在庫(2018 年 4 月分=平成 30 年 4 月分)

生産	:	9,798 kg	(前月比 11.5%減 年比 21.5%増)
出荷	:	9,896 kg	(前月比 7.7%減、前年比 31.2%増)
在庫	:	6,174 kg	(前月比 1.6%減、前年比 6.1%減)

(生産、出荷、在庫の出典は経産省生産動態統計調査)

4 月の生産は前月比減、前年同月比増。前年同月比は 3 か月連続の増。出荷は生産見合いから減少したが、前年同月比は増。在庫は生産減から前月比、前年同月比とも減。

【海外】

2018年5月のLME銅相場は前月と同水準の\$6,700～6,900/t圏を横ばい推移した。米国の景気指標、ドル高、米国の鉄鋼・アルミニウム追加関税、米中貿易戦争、銅独自の要因として中国の対米銅スクラップ輸入停止、インドの銅製錬所永久閉鎖の可能性などをめぐる動向がその背景。

米国経済は3月の製造業新規受注が2か月連続で増加、4月の非農業部門就業者数が伸びを加速、失業率は3.9%と2001年12月以来の3%台に改善、他方、住宅着工件数は2017年12月以来の低水準など強弱材料が交錯した。

ドルは対ユーロで月初の\$1.20台から月末にかけて昨年7月以来となる\$1.15台へと上昇した。好調な米国経済を背景に長期国債利回りが2011年7月以来となる高水準で推移していることを主因に、トルコの財政悪化、イタリアやスペインの政局不安もドル高に作用した。

米国の鉄鋼・アルミニウム追加関税はオーストラリア、アルゼンチン、ブラジルが適用除外とされた一方で、一時的に適用が停止されていたEU、カナダ、メキシコが適用対象とされた。

米中貿易戦争は両国の通商協議により回避される可能性が浮上したが、中国の対米黒字の2,000億ドル削減については合意に至らず、関税措置をいったん保留することで先送りされた。

銅独自の要因としては、中国の税関当局が米国産スクラップ輸入の事前検査認証業務を5月4日から1か月間停止し、中国への銅スクラップ輸出が全面停止された。さらに、スターライトカパーのツーチコリン銅製錬所は裁判所から能力増強計画の凍結を命じられ、環境規制当局からは永久閉鎖を命じられた。

供給障害要因としては、アントファガスタは5月9日、ロスペランブレス銅鉱山(チリ)の精鉱をロスヴィロス港まで流送するパイプラインが閉塞を起こしたため精鉱販売に影響が出ると発表した。年間販売計画は705～740千tを維持する。4月16日定修で閉塞が発見され、5月5日までに修復した。精鉱在庫を積み上げ、正常操業を回復するまでに3か月を要する見通し。

KGHMは5月15日、シエラゴルド銅鉱山(チリ)で設備点検中の下請け労働者の死亡事故が発生したため、操業を停止し、当局に通報したと発表した。

アサルコは5月16日、ミッション銅鉱山(米)の採掘箇所を変更した。3月21日、採掘ピットの一部で地滑りが発生し、当該箇所での採掘を停止した。このため生産損失が発生した。人身や設備の被害はなかった。

インペリアルメタルズは5月23日、マウントポリー銅鉱山(加)で経営側によるロックアウトの後、労組がストライキを開始したと発表した。労働協約は今年初めに期限

切れとなっており、新たな協約は結ばれていない。

スターライトカパーのツーチコリン銅製錬所(インド)は5月23日、マドラス高等裁判所に能力増強計画の停止を命じられた。環境森林省が第2生産ラインの環境許可更新申請の可否を決定する9月23日まで操業が停止される。同製錬所の生産能力を400千t/年から2020年度末までに倍増する計画に対し、地元ナンドゥリ県の住民が環境汚染を理由に製錬所の閉鎖を要求しており、5月22日には住民の暴動により13名が死亡、102名が負傷した。これを受け、28日、タミールナドゥ州政府は同製錬所の永久閉鎖を命じた。

豫光金鉛の済源銅製錬所(中国)は酸素プラントの故障のため5月28日から操業を停止した。生産能力110千t/年。改修工事には1か月を要し、操業停止期間は40日に達する見通し。この間、粗銅やアノードを外部調達する。

需給動向については、国際銅研究会によれば、2018年1~2月の世界の銅鉱石生産は前年同月比4.8%増の3,253千t、地金生産は3.3%増の3,879千t、消費は3.8%増の3,769千t、地金需給バランスは前年同期の+125千tから+109千tへとほぼバランス推移した。報告在庫は13.5%増の1,617千t、在庫/消費比率は3.1週間から3.4週間へとほぼ横ばいであった。

鉱石生産の内訳は精鉱が4.5%、SXEWは6%増加した。国別には前年がエスコンディーダ鉱山の長期ストに見舞われたチリ、前年1~4月に精鉱輸出が禁止されたインドネシアの生産が回復した。コンゴ民主共和国(DRC)とザンビアはSXEW生産が回復し、それぞれ10%、16%増加した。この間大規模な供給障害はなかったが、伸び率は一部の国の鉱石品位の低下により部分的に相殺された。国別にはカナダが9%、メキシコは3.5%、ペルーは2%、米国は9%減少した。地域別にはアフリカが11%、アメリカは4%、アジアは5%、ヨーロッパは2.5%、オセアニアは5%増加した。鉱山稼働率は79.7%から81.9に上昇した。

地金生産の内訳は一次生産が3%、二次生産は4.5%増加した。国別には中国が能力増強を背景に3.5%増加、チリは5.2%増加した。チリは前年2月のエスコンディーダ鉱山ストの反動でSXEW生産が7%増加したことが主因。昨年ストライキに見舞われたインドネシア、大型定修があった日本も実質的に回復した。DRC、ザンビアのSXEW生産も増加した。一方、ペルー、ポーランド、米国は減少した。地域別にはアフリカが7%、アジアは5%増加、ヨーロッパアメリカはと実質的に横ばいとなった。精製工場の稼働率は85.4%から86.9%に上昇した。

中国の見掛け消費(未報告在庫の増減を除外)はネット輸入が8%、国内生産が3.5%増加したことから9.2%増加した。中国を除く世界の消費は1%減少した。その他の主要国ではインド、EUが増加したが、日本、米国、韓国は減少した。

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

5/7 790 5/14 800 5/23 810 5/29 790 6/1 780

2. 銅地金生産・出荷・生産者在庫(2018年4月分=平成30年4月分)

生産 : 135,400t (前月比 3.3%減、前年比 14.7%増)

出荷 : 127,600t (前月比 11.4%減、前年比 3.3%減)

在庫 : 105,100t (前月比 10.0%増、前年比 13.0%増)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

平成30年(2018年)4月の銅地金生産は操業日数減のため前月比3.3%減、前年同月比は14.7%増の135.4千tと前年比は4か月連続の増加となった。出荷は前月比11.4%減、前年比3.3%減の127.6千tでそれぞれ4か月ぶりと2か月連続の減少となった。内訳は内販が前月比3.3%増、前年4.1%減の83.6千tで2か月連続の前年比減。輸出は前月比30.2%減、前年比1.9%減の44.0千tと前月比は5か月ぶりの減少。内販のうち電線向けは前年比1.0%増の50.8千tと10か月連続の増加。伸銅品向けは11.4%減の29.8千tで5か月連続の減少。在庫は前月比10.0%増、前年比13.0%増の105.1千tでそれぞれ3か月ぶりと4か月ぶりの増加となった。

3. 需要部門別動向

日本電線工業会によれば、平成30年(2018年)4月の銅電線出荷は前月比4.2%減、前年同月比0.6%増の56.9千t(推定)と前年比は2か月ぶりに増加した。うち内需は前年比0.5%増の55.3千t、輸出は5.3%増の1.6千tでともに2か月ぶりの増加。内需の部門別には、自動車が24か月連続、電気機械と建設電販は6か月ぶりの増加。一方、通信は6か月連続、その他内需は4か月連続の減少、電力は2か月連続の減少となった。

日本伸銅協会によれば、平成30年(2018年)4月の伸銅品生産は前月比3.6%減、前年同月比0.6%減の70.1千t(速報)と前年比は2か月連続の減少となった。うち内需向けは前年比0.5%増の57.9千tで2か月ぶりに増加、輸出は5.3%減の12.3千tで4か月連続の減少。品種別には、半導体、コネクタ、自動車端子向けの銅条が2か月連続、エアコン向けの銅管は4か月連続、自動車端子向けの黄銅条は16か月ぶりの減少、コネクタ向けの青銅板条は3か月ぶりに増加した。

鉛

【海外】

2018年5月のLME鉛相場は月初の\$2,300/t水準から月末にかけて\$2,400圏へとやや強含みに推移した。

米国経済は3月の製造業新規受注が2か月連続で増加、4月の非農業部門就業者数が伸びを加速、失業率は3.9%と2001年12月以来の3%台に改善、他方、住宅着工件数は2017年12月以来の低水準など強弱材料が交錯した。

ドルは対ユーロで月初の\$1.20台から月末にかけて昨年7月以来となる\$1.15台へと上昇した。好調な米国経済を背景に長期国債利回りが2011年7月以来となる高水準で推移していることを主因に、トルコの財政悪化、イタリアやスペインの政局不安もドル高に作用した。

米国の鉄鋼・アルミニウム追加関税はオーストラリア、アルゼンチン、ブラジルが適用除外とされた一方で、一時的に適用が停止されていたEU、カナダ、メキシコが適用対象とされた。

米中貿易戦争は両国の通商協議により回避される可能性が浮上したが、中国の対米黒字の2,000億ドル削減については合意に至らず、関税措置をいったん保留することで先送りされた。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2018年1~3月の世界の鉛鉱石生産は前年同期比8.9%増の1,250千t、地金生産は3.4%増の2,954千t、消費は4.0%増の2,991千t、地金需給バランスは前年同期の▲19千tから▲37千tへとほぼ横ばい推移している。

鉱石生産はアジアが15.3%、アメリカは1.2%、ヨーロッパは1.94%、アフリカは31.6%増加、オセアニアは6.6%減少した。国別には中国、モロッコ、トルコが増加した。地金生産はアジアが3.4%、アメリカは5.1%、オセアニアは33.3%増加、ヨーロッパとアフリカは横ばいとなった。国別には中国、オーストラリア、米国が増加、韓国は減少した。消費はアジアが4.8%、アメリカは4.5%、ヨーロッパは1.0%増加、アフリカは3.2%減少、オセアニアは横ばいとなった。国別には中国、米国が増加した。3月末の地金の報告在庫は前年同月比19.4%減の437千t、在庫/消費比率は2.3週間から1.9週間に低下した。

中国は鉱石生産が16.9%増の616千t、鉛精鉱輸入は22.1%減の134千t、地金生産は4.6%増の1,268千t、地金の輸出入は25千tから▲5千tへとネット輸出に転じた。この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫)は7.1%増の1,279千tとなった。

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

4/2 316 5/22 324 6/1 329

5月はLME鉛相場が中旬まで\$2,300/t台で安定した動きを示していたが、下旬で

は\$2,400 台へ上昇したため、鉛建値も価格水準を切り上げた。

2. 鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2018年4月分=平成30年4月分)

生産 : 15,603t (前月比 27.3%増、前年比 8.3%減)

出荷 : 15,293t (前月比 6.6%増、前年比 8.8%減)

在庫 : 12,094t (前月比 2.0%増、前年比 33.4%増)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

4月の生産は契島製錬所の定修明けにより前月比増だが、前年同月比は竹原製錬所の電解定修から減。前年同月比は6か月ぶりの減。出荷は生産増から前月より増加するも、前年同月比では減。前年同月比は9か月連続の減。在庫は生産増から前月比、前年同月比とも増。

3. 需要部門動向

3月の自動車生産台数は前年同月比1.0%増の939,120台となり、2か月連続で前年同月を上回った。乗用車は前年同月比2か月連続のプラス、トラックも同2か月連続のプラスだが、バスは同4か月連続のマイナスとなった。2017年度(平成29年度)の自動車生産は9,683,262台で2年連続のプラスとなった。

4月の自動車輸出台数は前年同月比16.2%増の432,137台となり、6か月連続で前年同月を上回った。

一方、3月の二輪車生産台数は前年同月比15.7%減の60,782台と6か月連続で前年同月を下回った。しかし、2017年度の二輪車生産は前年度比8.9%増の634,486台と2年連続で増加した。

(一社)電池工業会の調査によると、3月の自動車用鉛蓄電池のメーカー販売個数は、新車用、補修用、輸出用を併せた総合計で2,269千個(前年同月比1%減)と7か月ぶりに低下、自動車用以外の鉛蓄電池も711千個(同6%減)と7か月連続で低下した。その結果、鉛蓄電池の出荷はトータルで2,980千個(同3%減)と3か月連続の横ばいから再び減少に転じた。

鉛関連製品生産統計

		2月	3月
自動車	数量(台)	857,122	939,120
	前年同月比(%)	100.7	101.0
自動車用鉛蓄電池	数量(鉛量t)	16,216	16,944
	前年同月比(%)	96.8	94.8

(出所:(一社)日本自動車工業会, 経済産業省生産動態統計調査)

2017年度計(平成29年度計):自動車 9,683,262台(前年度比3.5%増)、自動

車用鉛蓄電池 197,489 鉛量 t(同 4.7%増、2 年連続の前年度比プラス)。

亜鉛

【海外】

2018 年 5 月の LME 亜鉛相場は前月比一段安の\$3,000/t 圏を頭重く推移した。前月末の LME 在庫急増の影響が尾を引いていることがその背景。しかし、今年の亜鉛需給は引き続き供給不足と予想され、LME 在庫も 5 月に入って減少傾向を辿っている。

米国経済は 3 月の製造業新規受注が 2 か月連続で増加、4 月の非農業部門就業者数が伸びを加速、失業率は 3.9%と 2001 年 12 月以来の 3%台に改善、他方、住宅着工件数は 2017 年 12 月以来の低水準など強弱材料が交錯した。

ドルは対ユーロで月初の\$1.20 台から月末にかけて昨年 7 月以来となる\$1.15 台へと上昇した。好調な米国経済を背景に長期国債利回りが 2011 年 7 月以来となる高水準で推移していることを主因に、トルコの財政悪化、イタリアやスペインの政局不安もドル高に作用した。

米国の鉄鋼・アルミニウム追加関税はオーストラリア、アルゼンチン、ブラジルが適用除外とされた一方で、一時的に適用が停止されていた EU、カナダ、メキシコが適用対象とされた。

米中貿易戦争は両国の通商協議により回避される可能性が浮上したが、中国の対米黒字の 2,000 億ドル削減については合意に至らず、関税措置をいったん保留することで先送りされた。

供給障害要因としては、ヴォルカンが 5 月 29 日、子会社チュンガルのアニモン、イスライ鉛亜鉛鉱山(ペルー)の採掘操業を停止したと発表した。操業は 5 月 28 日から停止され、再開の見通しは不明。チュンガルの生産能力は亜鉛 96 千 t/年、鉛 20 千 t/年、銅 1 千 t/年。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2018 年 1~3 月の世界の亜鉛鉱石生産は前年同期比横ばいの 3,086 千t、地金生産は 1.7%増の 3,305 千t、消費は横ばいの 3,280 千t、地金需給バランスは前年同期の▲18 千tから+25 千tへと供給過剰に転じた。

鉱石生産はアメリカが 2.6%、ヨーロッパは 2.3%、オセアニアは 13.0%増加、アジアとアフリカは 3.1%減少した。国別にはオーストラリア、トルコ、米国の増加がカナダ、中国、インドの減少に相殺された。地金生産はヨーロッパが 3.8%、アメリカは 3.4%、オセアニアは 4.6%増加、アジアは横ばい、アフリカは 14.3%減少した。国別にはオーストラリア、ベルギー、中国、ノルウェー、ペルーが増加、インド、米国は減少し

た。消費はアジアが 2.8%、オセアニアは 11.1%増加、ヨーロッパは 1.0%、アメリカは 7.2%、アフリカは 29.4%減少した。3 月末の地金の報告在庫は前年同月比 13.6%減の 1,151 千t、在庫/消費比率は 4.8 週間から 4.6 週間へと横ばいであった。

中国は鉱石生産が 3.7%減の 1,053 千t、亜鉛精鉱輸入は 21.9%増の 362 千t、地金生産は 2.1%増の 1,420 千t、地金のネット輸入は 251.9%増の 136 千t、この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫/国家備蓄)は 3.7%増の 1,466 千tとなった。

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

4/2	397	4/10	391	4/13	376	4/19	400	5/7	382	5/10	385
5/18	391	5/28	376	6/1	385						

5 月は LME 亜鉛相場が中旬まで\$3,000~3,100/t での小動きで推移したため、亜鉛建値も小浮動推移となった。月末では LME が\$3,100 台での動きとなったため、6 月初めには建値も上昇した。

2. 亜鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2018 年 4 月分=平成 30 年 4 月分)

生産	: 46,367t	(前月比 0.3%増、前年比 25.5%増)
出荷	: 44,296t	(前月比 20.6%減 前年比 0.1%増)
在庫	: 68,423t	(前月比 3.2%増、前年比 7.6%増)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

4 月の生産は前月比、前年同月比とも 2 か月連続の増。出荷は輸出の大幅減から前月比減だが、反対に輸出が前年よりも上回ったことで、前年同月比はかろうじて 2 か月連続の増となった。在庫は前月比、前年同月比とも増。前年同月比は 15 か月ぶりの増。

3. 需要部門動向

4 月の鉱工業生産指数は前月比 0.3%増、前年同月比 2.5%増の 104.4(季節調整済、2010 年=100 基準、速報値、以下同じ)となった。前月比は 3 か月連続の上昇、前年同月比も 18 か月連続の上昇となった。輸送機械工業の増加が寄与した。経済産業省は生産の基調判断を「緩やかな持ち直し」に据え置いた。

生産指数は 15 業種のうち 8 業種が前月から上昇し、7 業種が低下した。自動車など輸送機械工業は前月比 3.9%上昇した。汎用・生産用・業務用機械工業は同 1.4%上昇。一方で電子部品・デバイス工業は同 5.6%の低下だった。

4 月の出荷指数は前月比 1.8%増の 103.3 と 3 か月連続のプラス、前年同月比も 3.8%増と 18 か月連続のプラスとなった。

一方、在庫指数は前月比 0.4%減の 113.0、在庫率指数は前月比 2.9%減の 113.7 となった。

大企業の生産見通しを示す製造工業生産予測指数では、5 月が前月比 0.3%の上昇、6 月は同 0.8%の低下を見込んでいる。

3 月の亜鉛めっき鋼板生産(次工程用消費を除く)は 4 か月連続の前年同月比マイナス。しかし、2017 年度(平成 29 年度)の生産は前年度比 0.7%増の 10,559,852t と 2 年連続で前年度実績を上回った。

3 月の伸銅品生産量は 72,724t(確報値、対前年同月比▲1.6%) (対前月比+7.3%)、6 か月振りに対前年同月比マイナスとなったが、7 万 t 越えて、2017 年(平成 29 年)6 月(72,815t)以来の高水準(1 月+2.0%、2 月+0.3%)。全 14 品種中、対前年比プラスは 2 月に比べ 4 品種縮小して 5 品種。銅条・管・棒・線、黄銅管・棒、青銅板条・棒線、その他銅合金板条が対前年比マイナスとなった。内需向け 59,705t(速報値、以下同じ)、6 か月振りの対前年比マイナス(▲1.4%)。輸出向け 12,940t、3 か月連続の対前年比マイナス(▲2.9%)。

黄銅製品では、黄銅条が 9,683t(対前年比+5.5%)、15 か月連続のプラス。黄銅棒は 16,516t、2 か月連続の対前年比マイナスとなった(対前年比▲3.6%)。昨年同時期の高水準な輸出との対比ではマイナスだが、全体としては堅調を維持している。水栓金具、バルブ、自動車需要はいずれも堅調に推移。

2017 年度(平成 29 年度)の黄銅製品生産全体では 2 年連続の前年度比プラス。2017 年度の亜鉛ダイカスト生産は 7 年ぶりの前年度比プラス、亜鉛華も 2 年連続の前年度比増と堅調。

亜鉛関連製品生産統計

		2 月	3 月
亜鉛めっき鋼板	数量(t)	809,909	948,627
	前年同月比(%)	94.1	97.3
黄銅製品	数量(t)	28,553	30,039
	前年同月比(%)	101.3	99.3
亜鉛ダイカスト	数量(t)	1,639,046	1,829,865
	前年同月比(%)	109.8	92.4
亜鉛華	数量(t)	4,906	5,667
	前年同月比(%)	92.4	87.9

(出所:経済産業省生産動態統計調査)

2017 年度計(平成 29 年度計): 亜鉛めっき鋼板 10,559,852t(前年度比 0.7%増)、黄銅製品 341,008t(同 2.2%増)、亜鉛ダイカスト 19,942t(同 5.3%増)、亜鉛華 60,868t(同 3.1%増)